

シナイ通信

第9号

平成18年9月30日

NPO 法人 シナイモツゴ郷の会

TEL / FAX (0229-56-2150)

MAIL shinaimotsugo284@ybb.ne.jp

<http://www.geocities.jp/shinaimotsugo284/>

989-4102 宮城県大崎市鹿島台木間塚
字小谷地 504-1 鹿島台公民館内



「だれでもできる自然再生技術と体制づくり」全国へ発信

郷の会が結成依頼取り組んできたブラックバス駆除や在来魚復元のための簡易技術の開発と体制づくりは、バス駆除人工産卵床の改良、シナイモツゴ人工繁殖方法の開発と里親制度の確立、ゼニタナゴ移殖の成功など画期的な成果をあげてきました。これらの成果を発信して普及利用を図ることにより、全国の自然再生市民運動を支援します。

公開シンポジウムを開催 11月25-26日

来る11月25～26日に大崎市の誠真短期大学で2年ぶりの公開シンポジウム「ブラックバス駆除と水田魚道による自然再生」を開催します。栗原市築館で水田魚道による自然再生を目指すナマズの学校、農村環境整備センター、全国ブラックバス防除市民ネットワークとの共催です。

外来魚の中でとりわけ深刻な被害をもたらしているオオクチバスは主に平野部の湿地帯に生息していますが、これらの湿地の多くは農村にあって、農業関係者が管理しています。自然再生にオオクチバスの駆除が急務であることは明白であることから、農業関係者や農村住民との連携が不可欠です。このシンポジウム

では被害の実態を明らかにしながら、農業振興を視野に入れた自然再生を提案していきたいと考えています。特に、郷の会が開発した簡易なバス駆除や在来魚復元方法とこれを用いた実践活動を中心に、だれでもできる自然再生技術と体制づくり



里親小学校のシナイモツゴ人工繁殖専用池

くりを紹介します。

開催内容は全国の農業関係機関に周知されるとともに、インターネットで自然再生に関心を持つ全国の市民へ配信されます。農業関係では魚類復元による自然再生を主題にしたシンポジウムは初めての試みということで注目を集めそうです。したがって、全国から多くの農業関係者や市民が参加すると思われます。10月初めから本格的な準備を開始しますので、会員

各位のご協力をお願いします。

プログラムなどはシナイモツゴ郷の会のホームページをご覧ください。

郷の会初の新刊本を11月に発刊・・・全国の書店から

長らくお待たせしました。「ブラックバスを退治する - シナイモツゴ郷の会からのメッセージ」が恒星社厚生閣から近々、発刊されます。これは当会が2004年11月に開催したシンポジウム「生態系保全とブラックバス対策」の内容を土台に企画し、ブラックバス問題など自然再生と取り組む研究者や活動家に最先端の研究や活動を紹介してもらいました。執筆には5名の郷の会会員が加わり、近畿大学農学部の細谷教授と高橋副理事長が編集しています。これまでに会員が撮りためた多くの写真も収録されています。ご期待下さい。

バス駆除新兵器の実用化と市販

高橋副理事長が考案し宮城県が特許を取得した営業センサー付バス駆除人工産卵床が製品化され5月から販売されました。すでに伊豆沼や琵琶湖、福島県などで200基以上が使用されています。東北興商株式会社(仙台市若林区、TEL:022-288-1617)が制作販売し、郷の会が技術指導しています。H16年4月に特許申請以来、シナイモツゴ郷の会は3シーズンにわたって伊豆沼で試作品を設置して現場実験を重ねて改良を加え、実用化に成功しました。

センサー装着人工産卵床を使うことにより初心者でも少数で確実にバスの営業を確認することができず。同時に、堅



販売を開始したセンサー装着人工産卵床

固な人工産卵床を提供することで、小人数の組織がバス駆除に参加できるようになりました。くわしくは当会ホームページ / 魚類学会発表と東北興商ホームページをご覧ください。

ゼニタナゴ&シナイモツゴ救出作戦

東北地方の代表的な在来種で絶滅が最も危惧されているゼニタナゴとシナイモツゴが、昨年来、鹿島台の生息池で減少しています。至急、原因を調査し対策を検討する必要があります。今年12月9日に生息池の池干しを行い、ブラックバスなど外来種の侵入が確認されれば直ちに徹底的な駆除を行い、底質などの環境悪化が原因と考えられる場合は干出による底質改善を図ります。

池干しする前にゼニタナゴとシナイモツゴを定置網で捕獲し、隣接するため池の生簀へ隔離して一時避難させます。池干し時は地曳網やタモ網でブラッ

クバスなど外来種を捕獲すると共に池底の清掃を行います。

ゼニタナゴは秋にドブガイへ産卵しますが、貝の中でふ化した稚魚への影響を少なくするため、水温低下期の12月に池干しを行うことになりました。ゼニタナゴは全国に10カ所しか生息しない大変貴重な魚です。これを保護して、後世に伝える大切な調査になりますので、みなさま奮ってご参加下さい。

本調査は農政局の助成事業「農村景観・自然環境保全再生パイロット事業」として採択されています。この事業は参加したボランティアの労賃に見合った金額で、物品購入など必要経費を支払うというユニークな方式を取っているため、参加人員の確保が必要不可欠となっています。事前調査を含め、皆様のご参加をお待ちしています。

池干しでブラックバス再放流禁止の効果を確認 坂本 啓

今年度郷の会が実施する池干しによるブラックバスの駆除は、12月に予定されておりますが、ここでは今年他団体が主体となって行った大崎市鹿島台周辺における池干しの結果について報告したいと思います。

平成18年9月3日、大崎市鹿島台広長地区の広長育成会が主体となって宮の沢ため池で池干しが行われました。当日は約60人が参加し、豚汁がふるまわれるなど楽しいイベントとなりました。郷の会からは数名が池干しに参加しました。池干しの結果、コイ科魚類などの小型魚がまったく見られず、確認されたのは30cm程度のヘラブナ195尾、60cm超のコイ21尾、そしてオオクチバス214尾でした。さらにこのバスの内55尾の全長組成を調べたところ、30cmを超えるものが2尾のみと少なく、また当歳魚と思われるサイズのバスは見あたりませんでした。この事例は以前平成16年9月に池干しを行った坪ヶ沢ため池と似ています。坪ヶ沢ため池では、20cm前後のバスが多く、25cm以上のバスが極端に少ない上に、産卵可能な全長30cm以上の雌親魚は皆無でした。この理由として考えられるのは、平成16年5月から宮城県で導入されたブラックバス再放流禁止の内水面漁場管理委員会指示です。郷の会は委員会指示の発動を受けて、地元小中学生へ、常にバスを再放流しないよう要請してきました。坪ヶ沢や宮の沢は中学校から比較的近いバス釣りスポットであり、これらの池の主な釣り人は中学生でした。元々、小規模なため池であるため、30cmを超えるバスはせいぜい20~30尾ほどしか生息できないこともあって、中学生たちが再放流しないで駆除したことにより、バスの大型魚が全滅し、産卵が行われなくなって当歳魚が出現しなかったと考えられます。この調査結果は、再放流禁止が守られたことにより繁殖が阻止された事例として重要です。

次に平成18年9月10日、大崎市鹿島台山谷地区で山谷行政区が主体となって行われた生袋ため池下段の池干しについて報告します。当日は約20人の地元住民が参加しました。このため池は平成15年、平成16年に池干しを行っており、今回を含めると4年間で3回の池干しが行われています。1回目の池干しでは多数のブラックバスが捕獲され、他の魚としてはコイ、フナ等の比較的大型の魚が確認されました。これが2回目の池干しになると、少数のバスの他にコイ、フナ、そして小型魚であるモツゴ等が確認されるようになりました。そして今回の3回目の池干しでは、すばらしいことにバスは1尾も確認されず、コイ、フナの他に、モツゴ、タモロコなど小型のコイ科魚類が多数確認されました。これらの魚類はこのため池に隣接する上段のため池などから供給されたものと考えられます。1回目の池干しではバスの脅威を完全に駆除できなかったため池でも、定期的に池干しをすることで徐々に在来魚が戻ってくることが再確認されました。またこの結果は、池干し後にバスの侵入や密放流がなく、自然状態で生態系復元に成功した事例としても重要であると考えられます。

バスが侵入したため池における池干しによるバスの完全駆除は里山の生態系を保全し再生する上で極めて重要であり、バスが侵入したため池で池干しが行われないことは、バスへ繁殖場所を提供するばかりか、そこで生まれたバス稚魚が水路を通り、他の場所でさらなる被害をもたらすという「被害の連鎖」をも産むことにつながります。池干しによって被害の連鎖を断ち切り、一つでも多くのため池の生態系が復元するよう今後もねばり強く取り組んでいく必要があります。

春の移動研修会 秋田県仙北市田沢湖の自然に触れて

財団法人伊豆沼・内沼サンクチュアリセンター

藤本泰文

「今回の紀行文を書いてみない？」と高橋さんに声を掛けられた時、私は条件反射的に頷いていました。あの素敵な笑顔に魅了されたのでしょうか？はたまた私の腰が軽過ぎるのでしょうか？紀行文を書くのはは中学校の遠足以来ですが、しばしお付き合いを。

「イバラトミヨの生息地を見たい」、「トンギョの会との交流も楽しみ」オオクチバスの駆除に取り組んでいる大沼を拝見！」と、期待を膨らませつつも秋田はやはり遠く、バスで片道3時間少々。さらに元気なヒーローは待ち合わせの時間に遅れて参上...とまあ、お昼前ようやく田沢湖のそばにある三村さんのご自宅に到着しました。三村さんは田沢湖生物研究会を主宰し、今回のシナイモツゴ郷の会とトンギョの会の交流会開催に深く関わった方です。とても素敵なログハウスが何棟もあるご自宅。さらに、本業は画家である三村さんのギャラリーが併設されていました。三村さんの絵は、印象的な自然の光景を穏やかなタッチで描写していて、(ありきたりな表現しかできないのですが)私は自然の息づかいを感じました。

お宅を拝見した後、シナイモツゴ郷の会と三村さん、トンギョの会が輪を囲み、交流会が開かれました。イバラトミヨやシナイモツゴ、ゼニタナゴなどの保全活動の現状について、それぞれの団体から紹介があり、今後の活動のあり方が話し合われました。お腹を空かせつつも、興味深い話が続き、正直、私の頭の中は食欲と好奇心が行ったり来たり。昼食では、おいしいキノコ汁が振舞われ、参加者が持参した山菜料理や、ドジョウ料理を頂き



トラツグミとの感動的な出会い

ました。

昼食後、田沢湖そばのイバラトミヨの生息地を、トンギョの会の方々に案内して頂きました。清冽な水が豊富に流れるため池と水路は、宮城ではなかなかお目にかかれない光景。その中にイバラトミヨは生息していました。

トンギョの会の方に見せて頂いたイバラトミヨは、全長5cmほどのとても小さな魚。この小さな魚が鳥のような巣を作って子育てをするそうです。この生態を持つまで進化するのに、彼らはどれくらいの時を重ねたのでしょうか。生き物の歴史の長さを感じます。

こんなことを書いておきながら、落ち着きのない私はイバラトミヨもそこそこに、生息地の周囲が気になって、うろろうしていました。あまり見掛けない鳥がいたので、カメラに撮りました。鳥に詳しい三村さんに尋ねると、トラツグミという稀な鳥だそうです。私は古いデジカメを使っていたのですが、写真を見てみると少しぼやけていて、ちょっと悔しい。「カメラが古くて、それでは画質が悪い。せっかくの写真が惜しいなあ」との三村さんのお言葉。新しいカメラが欲しくなりました(財団様、給料アゲテクダサイ)。

残りの時間で立ち寄ったのは、田沢湖湖畔に立つ観光名所の「たつこ像」。金色の像は不思議な青さをたたえた田沢湖に鮮やかに映えて、その色合いは美しくも見えますが、率直に言うと、安っぽいいかにも作られた観光名所という感じ。自然の息づかいを感じさせる三村さんの絵や、イバラトミヨが重ねてきた年月の方に美を感じるのには私だけではないと思うのですが、いかがでしょうか。

時間の関係上、オオクチバスの駆除に取り組んでいる大沼へは行けず、残念そうな斉藤さん。私も少し残念。後日、現地の写真を見せて頂く機会がありました。しかし、直接現地を見て大沼でのバス駆除について、皆で話し合う時間があればとも思いました。

イバラトミヨもシナイモツゴもゼニタナゴも、生息地の数が限られている魚です。イバラトミヨは清水、シナイモツゴはモツゴから完全に隔離された水域、ゼニタナゴは二枚貝など、それぞれ守るために必要な要素は異なります。しかし、守っている小さな1つ1つの生息地を核に、失われてきたかつての生息域を復元していく将来像は同じだと思います。同じ将来像を支え合う意味で、保全に取り組む団体が今回のような交流をもつことは意義深いことだと感じました。今後もこのような活動を郷の会が続けていかれることを期待しています。三村さんのご自宅にはゲストハウスもあり、何人も泊まることが可能だそうです。次回はぜひ泊りがけで語り合えればとも思いました。

最後に、今回の企画にお誘い下さいましたシナイモツゴ郷の会の皆さま、貴重な生息地を案内して下さいました三村さんとトンギョの会の皆さまに深く感謝致します。また、若輩者の私に紀行文を書く機会を下さいました高橋さん、シナイモツゴ郷の会の皆さまに感謝致します。最後までお読み頂きありがとうございました。

“品井沼ひしが食卓に置いてある日”を目指して～2年目～

品井沼ヒシ特産化プロジェクト班
佐藤 豪一（ひでかず）

ヒシ栽培2年目の今年、用水確保を重要視した結果、お隣の美里町南郷の現役バリバリの水田をお借りし、この田んぼひとつに絞ってプロジェクトを進めることにしました。こちら面積がなんと3,400㎡。昨年と比べ格段に広い田んぼになりました。私は、最初この面積の見当がつかせませんでした。

種蒔きまで

ヒシ種子の保存もうまくいき、代掻き作業も無事終わり、4月8日種蒔きです。当日はあいにくの小雨でしたが、報道関係の方も駆けつけてくださりカッパを着ての作業となりました。同時に元肥も施しました。用水路には水がまだ来ておらず、しばらくは揚水ポンプにて水入れが必要のようです。今年の宮城県は春、低温の日が続きました。

開花まで



私の大好きなヒシご飯

種まきしてから一ヶ月と少しの5月中旬。河川の天然ヒシは既に水面に葉を見せていますが、ヒシ田は音沙汰無し。と…心配しかけた

5月下旬、やっと葉が展開し始めました。

初夏、気温が平年並に戻りつつヒシの葉数も増えていきました。昨年の同時期と比べてもだいぶ株の張りが良い様に見えます。

7月中旬に花が咲きました。しかし一足先にあの“ジュンサイハムシ”がどこからともなく飛んできて、人目もはばからず大繁殖していたのです。(注)このヒシ田は食べ放題のレストランではありません。

収穫まで

ハムシに食われつつも株の密度は高くなっていき収穫のめどが立った頃、ヒシの販売を行なう“品井沼ヒシを育てる会”が新たに立ち上がりました。この会は一般の方や地元商店で成り、ヒシの生産・販売を担います。今

後“郷の会”は“育てる会”にヒシ栽培の技術を提供していくという形で進んでいくことになりました。

さて、葉の虫食い穴が目立ってきた8月26日、ヒシ田の見学会を開催しました。ヒシの塩茹でを食べましたがこの時期のヒシは皮が柔らかくて剥きやすく、実に水分が多くジューシーな感があり、昔を知る人々が事ある毎に言う通り「おやつ代わりになりうるなぁ」と思いながら、もう一つまみしている自分がいた見学会でした。

9月9日ヒシの初収穫です。薄曇りのはっきりしないお天気の中さっそくヒシを採っていきます。だだっ広い田園地帯の真ん中で何もしゃべらずただ黙々とひとつの作業に集中できる時間というのが案外気持ちよかったです。集中していたのか意識を失っていたのか分かりませんが、いつの間にかお昼近く。今日は郷の会&育てる会特製のヒシご飯が食べられるからでしょうか、じゃり道の農道には報道関係やら近所の方たちやらがたくさん集まっていました。そして私もひと口…おいひい。香り・味・食感ともに最高のバランスではないですか！！やはり野菜は新鮮なものに限ります。ヒシの収穫時期に



品井沼ヒシは**すがい**酒店 0229-56-5746 で購入できます。

もよりますが、ある程度歯応えがあるため“もち米”とも合うはずです。

これまで

とりあえず、これまでの状況を連ねてみました。もうじき注文に応じて発送作業を地元の商店から行なうことにしています。ヒシ詰めのパックにはちょっとした風情ある絵なども付けてみたいと考えております。これからの事はおいおい紹介していきますので、それではまた

稚魚から育てる里親募集(第2次)

春の募集に続いて、稚魚から育てる里親(若干名)を募集します。里親規則により宮城県内の方に限定させていただきます。ご希望の方は郷の会事務局または担当の二宮(電話・Fax 0229-56-5671)までご連絡ください。資料をさしあげます。募集期間 平成18年10月1日から15日 里親に決定した方には10月28日、29日に行われる鹿島台文化祭で里親を依頼する予定です。

私は、現在宮城県大崎市岩出山という自然がまだ残っている恵まれた地域に住んでいます。住み始めてまだ5年と、周りにどのような自然が残っているのかわかっていないのが現実です。シナイモツゴ郷の会との出会いで一番の要因は家族です。妻は生き物が嫌いなのですが、生命に対する教育の大切さには理解があり、小動物の飼育には大賛成でないものの賛成をしてくれること。また、子供は3人で、子供たちが全員生き物好きで、私が大の釣りキチであり生き物が大好きであることが動機となりましたことを最初に述べておきます。

事は、平成16年夏、近くの小さな沼で釣りをしたところ、ミミズではなかなか釣れず、練りエサを使用したら小さいフナがたくさん釣れました。そればかりか、水際の練りエサがこぼれたところに小魚が群れているのを発見して、その小魚がなんなのか気になり、魚釣りから雑魚捕りになっていました。

話はかわりますが、皆さんは、在来魚、移殖魚、外来魚という言葉をご存じですか。私は、釣りをしていたのである程度の知識をもっていました。今回の事で認識を新たにしました。まずは言葉の簡単な説明をします。在来魚とは、昔からその土地に住んでいる魚のことです。移植魚とは、おもに関西地方から人間の手で移殖されて、その土地に住み着いた魚のこと。外来魚とは、その名の通り、外国からきた魚のことで昔は、雷魚(らいぎょ)と呼ばれる魚やタイリクバラタナゴが有名で「昔」20年ほど前は、どこの沼でも普通に見られた魚です。ここでなぜ、「昔」と表現するか？それは皆さん、もうお気づきだと思いますがその通りなのです。タイリクバラタナゴという外来魚は、今ではとても珍しくなりほとんどの沼で見られなくなってしまいました。ではなぜ見られなくなったのか？それは、メダカのような環境破壊のためでしょうか？ちょっとちがいます。それこそ同じ外来魚であるブラックバスと言われる魚(小魚を食べる)が原因でタイリクバラタナゴという魚は見られなくなってしまいました。



水槽の底に沈んだ餌を食べるシナイモツゴ

見られなくなった今では珍しいタイリクバラタナゴが捕れたのでとても喜んでいました。また、ブラックバスのいない沼が存在していた事に・・・悲しいことに過去形になってしまいました。

まだその沼にはいろいろな生物がいるに違いないと、子供たちを連れて雑魚捕りに再度いってみました。今度は、タイリクバラタナゴのほか、トウヨシノボリ、ヌカエビ、クチボソ(モツゴ)が捕れました。子供たちは大喜びで魚を手にとって遊んでいます。私も大喜び。私の子供の時代の沼がそこにはあったから。家に帰り早速小さな水槽を買って雑魚を飼育しました。ホームセンターで雑魚用のエサを買いに行ったら、驚いてしまいました。

なんとタイリクバラタナゴが1匹数十円で売られていたです・・・おもわず計算してしまいました。

平成18年度 会費納入のお願い	
本会は会員の年会費で運営しています。	
郵便振込みでお願いします。	
振込用紙は公民館にあります。	
正会員	2,000円
賛助会員 個人	1,000円
団体・企業 1口	10,000円

17年夏、外来種のタイリクバラタナゴはいっぱいいるが、在来種のタナゴっているのかな？と小さな疑問が浮かびました。私の小さい頃からのタナゴといえば、このタイリクバラタナゴばかりだったと記憶しています。疑問を解消するため今度は、沼に合流する近くの水路を見てまわりました。水路にもたくさんのタイリクバラタナゴがいました。その中に動きが遅い雑魚がいることに気づき、それを捕ってびっくり。なんとメダカでした。小さな群れを作りメダカの学校をしていた。メダカを数匹持ち帰り水槽の仲間に加えました。

今年は鑑賞だけでなく、繁殖ができれば子供の教育にも役立ちそうとインターネットで雑魚の事を調べてみました。そこには意外な事実があったのです。なんと、いままで在来魚と思っていたクチボソ(モツゴ)が移殖魚という事実を知ってしまったのです。また、東北地方には、シナイモツゴという在来種がいた事もわかり、今度は、シナイモツゴを検索していたら、シナイモツゴ郷の会を知るきっかけとなった次第です。

今は、シナイモツゴの棲める環境づくりに微力ではありますが協力しようと、シナイモツゴ郷の会に参加させていただいています。皆さんも、昔の沼に興味がありましたら、シナイモツゴ郷の会のイベントに参加してみたいかがでしょうか。

鹿島台文化祭展示アイデア募集中

今年も郷の会専用ブースでにぎやかに展示します。

期日: 10月28日(土)・29日(日) 9:30~

場所: 鹿島台鎌田記念館

今年は日野自動車グリーンファンドの助成を受けてシナイモツゴ里親の取り組みをおこなっています。里親学校の鹿島台小学校と受け入れ先の栗原市立玉沢小学校の参加をいただき、ついにブラックバスを駆除した水域への移殖が実現しました。今回は鹿島台小学校の4年生担当の藤井先生と個人の里親丹野さんからのお便りをご紹介します。

鹿島台小学校では、4年生が総合的な学習の時間に、シナイモツゴ郷の会からお預かりしたシナイモツゴを校舎前の専用池で育てています。今年度の主な活動について紹介します。

5月10日 学校のシナイモツゴ専用池の池さらい

「郷の会」の方のお手伝いで、4年生105名が、シナイモツゴの池さらいを体験しました。

入学した時から時折池をのぞいたりして親しみを感じていましたが、実際に網ですくったり、すくったシナイモツゴを掌にのせて観察したのは初めてです。日頃、川や池などに入って遊ぶ経験の少ない子どもたち。最初は恐る恐るの子もいましたが、郷の会の方のご指導で、歓声を上げながら生き生きと活動することができました。オスは怒ったような目の形が特徴です。それに気付いた子どもたちは、思わず笑ってしまいました。また、長い時間掌にのせているとシナイモツゴが弱ってしまうことを教えていただき、子どもたちは、「命の大切さ」を感じたようです。

5月23日 栗原市立玉沢小学校で行われたシナイモツゴの放流会に、4年生の代表6名が参加

里親の先輩として、「大切に育ててください。」と呼びかけてきました。他の学校の放流会に参加し、「シナイモツゴを守ろう」とする活動が鹿島台から様々な地域に広がっていることを実感して、「自分たちも一生懸命大切に育てよう」という気持ちが高まったようです。

6月7日 シナイモツゴの卵の放流会

郷の会の方のご指導で、4年生が、素焼きの鉢に産み付けられた卵を鉢ごと3鉢を専用池に設置しました。卵をよく見ると、すでに目がついており中でぴくぴく動いています。「もうすぐ産まれるよ。」との郷の会の方のお話に、子どもたちは目を見張っていました。「卵が産まれて、池に出た！」と、まさしく孵化の瞬間を見ることができた子もいました。また、この日、郷の会から、「ひし」のペットボトルビオトープを各クラスに一本ずつ寄贈していただき、教室に置いて観察をはじめました。

6月～9月 調べ学習

「池さらい」や「卵の放流」の活動を通して、不思議だなあと感じたことやもっと知りたいと思ったことから課題を作り、調べています。

9月～ ビオトープで生き物を観察

学校から10分程の距離にある横山ビオトープにクラス毎に出かけ、フナやザリガニなどの生き物を網などですくい、生き物を観察する予定です。ゲストティチャーとして「郷の会」の方のご支援をお願いしています。



池掃除をする子供たち

教室でシナイモツゴの飼育・観察

教室でも水槽でシナイモツゴを飼い、身近にその生態を観察する予定です。

専用池の他に、職員玄関前の2つの水槽でシナイモツゴを飼育しています。餌やりなどの世話は、4年生が学期ごとにクラス交代でしています。春先は冬眠の時期で、シナイモツゴがあまり動かず餌をやらなくても良いことが分かりました。冬眠が終わると、すごい食欲を見せます。餌をやるとたちまち水面に集まってきて「ピチピチ、ピチピチ」と物凄い音をたてるのです。体を水槽に打ち付ける音かと思っていたら、食べる時の口の音だそうです。

シナイモツゴの里親になって

塩竈市 丹野 充

昨秋 10 月シナイモツゴの成魚をあずかり、冬季間は屋内で飼育しました。春になり、止む無き事情で予定より 1 ヶ月ほど遅れましたが、屋外での産卵準備にとりかかりました。8 月現在、十数匹の稚魚が体長約 2 ~ 3 cm まで成長しております。

産卵準備としては、120L のコンテナ箱に 5 mm 前後の川砂利を敷き、オモダカ（クワイの一種）を植えました。プラ鉢を下げて間もなく産卵が始まったので、魚眼卵を確かめながら、60L のガラス水槽に鉢を移し孵化するのを待ちました。しかし、数百個の産卵数でも孵化後の生存率が低かったことは大変残念でした。

原因は初期の餌の準備が遅れたためと推測しています。また、昨年までは、他所から採取したミジンコを与えるだけでしたので、長く生かすことが出来ませんでした。その反省から、「良好な水づくり」をすれば餌の確保や水質保全も可能になると考え、前から考えていた培養水をつくることにしました。

まず、鶏糞と米糠を水に投入し、数日後水が褐色になった時、別の透明な容器の水に少しずつ加えていくと、やがて水が緑色に変わって来ます。この水はグリーン・ウォーターともいわれ、孵化後の稚魚に必要な餌となり、顕微鏡で見ると動植物プランクトンの存在が

確認できます。この緑水を飼育槽に毎日少しずつ透明度を見ながら与えていきます。稚魚が成長するにつれ、市販の人工餌を与えても結構ですが、与え過ぎは水質悪化にもなりますので十分な配慮が必要です。

それから、ミジンコの生息数を確認する為に、3 週用のグラスウールや棕櫚皮を長さ 10 cm 位に束ねて水底に沈め、数日後に取り上げて容器で十分に水洗いして、底に沈みこんでいるミジンコの数を観察しながら給餌を加減する事も出来ます。

いわゆる水槽は湖沼を小規模化した水棲生物界でもあります。水質が変化し易く、小魚を食物連鎖の頂点として、低次レベルの細菌類や原生動物のツリガネムシ、ラッパムシ、微小後生動物のワムシ、ミジンコ、藻類、貝類など、それぞれが重要な役目を果たしながら生きています。この循環型世界のバランスが崩れてしまうと、水質悪化を起こし、やがて、全ての水棲生物が死滅してしまいますので、水槽内でのバランスを維持することが、特に大切だと考えています。

以上、私の飼育方法の一端を述べましたが、さらに工夫を重ね、水槽でのシナイモツゴの繁殖に取り組んでいきたいと思っています。



おおよそ三十年前の大学院生時代、学会出席のため研究室の教授に同行し上京中の特急はつかりの車中でのことです。「君の出身の鹿島台で見つかった貴重な魚が、今はどこを探しても見つからない」。突然飛び出した教授の言葉に驚くばかり、恥ずかしながら全くの初耳でした。

この魚は、発見地であり県下最大の湖沼であった品井沼の地名にちなんでシナイモツゴと一九三〇年に命名されました。海魚を含め県内の地名が付いた唯一の魚です。しかし、四〇年代から県内では正式な採捕報告がなく、つづじと消息が途絶えてしまっていたのです。これ以来、この魚がいつも頭から離れませんでした。

シナイモツゴは最大で八センチ程度の小型魚で、ゴイヤフナの仲間です。日本にのみ分布していますが、かつて関東・東北地方でドジョウやフナと同様、普通に生息していました。しかし、近年、急激に減少し、現在、生息が確認されているのは全国でもわずか、絶滅が心配されています。このため、環境省は絶滅危惧（きん）種に指定して保護を呼び掛けています。

減少原因としては、関東以南に分布しているが、その後二十年を経過して絶好の機会に恵まれました。九三年、モツゴは、最近、コイ・フナなどとともに東北地方に移殖され、シナイモツゴと交配してシナイモツゴの子孫（高橋 清孝）

たかはし・きよたか氏 NP O 法人シナイモツゴ郷の会副理事長。1951年11月、大崎市鹿島台生まれ。東北大学農学部大鹿島台の自宅から車で通勤。54歳。

学院修了。78年、県職員に。現在は県石巻水産研究開発センター海洋資源部長。ブラックバスの捕獲網考案者として知られる。大崎市

石巻河北コラム「つづじ野」に投稿したシナイモツゴのエッセーです。
9 回連載で 2 回目以降をシナイモツゴ BCC 通信で配信予定です。
BCC 通信を配信希望の方はメールでお知らせください。

シナイモツゴBCC通信から（NO54：5月31日配信）

みなさま

伊豆沼の水面ではハスの葉が顔を出し、アサザやガガブタがにぎやかに繁茂し始めました。私は週1～2回通っていますが、その都度、景色が変わるので、毎回、とても楽しみです。

全国ブラックバス防除ウイーク

郷の会の安住理事長が会長を務める全国ブラックバス防除ネットワークの呼びかけに応じて20～28日に全国で外来魚駆除のイベントが開催されました。マスコミにも取り上げられ、一般の方々の理解を深めるのに大いに貢献しました。

郷の会は多くの団体の協力を得ながら里親が育てたシナイモツゴをブラックバスが生息しないため池へ放流しました。当初、昨年夏にバス駆除のため池への放流を計画していましたが、安全性を考慮して一昨年池干しでブラックバスが生息しないことを確かめた隣接する上流ため池へ放流しました。上流のため池は隣接する下流ため池へ直接流れ込む親子ため池であり、上下一体の親子ため池です。下流ため池でバスの完全駆除を続けながら、上流ため池から自然繁殖したシナイモツゴの流下を待つこととなります。今回は間接的ではありますが、初めて生態系復元を目指して人工繁殖したシナイモツゴを放流することができました。

参加頂いたみなさまありがとうございました。放流の様子は添付の朝日新聞(5月24日付け)をご覧ください。

シナイモツゴの人工繁殖

繁殖池での採卵と里親校の受け入れ準備に里親プロジェクトスタッフは大忙しです。今年は鹿島台小の他に小牛田小、東松島小、大倉小の4校が卵からの飼育に挑戦します。昨年から1年かけて育てたシナイモツゴも5月28日に個人の里親へ配布しました。

里親プロジェクトはスタッフ募集中です。

品井沼ヒシプロジェクト

栽培水田では2週間前から見事にヒシの葉が出そろいました。ヒシ特産化プロジェクトは週4回体制で栽培水田の水管理を行っています。土曜日は畦はんの除草や補修作業を行います。ご参加下さい。

期日:6月3日(土)8:00 集合場所:鹿島台公民館

伊豆沼バス・バスターズ

県が特許申請、郷の会が実用化し、東北興商株式会社が製品化したブラックバス卵駆除用センサー装着人工産卵床の動作試験と改良を伊豆沼で行っています。これまで1ヶ月間、センサーの調整を続けてきましたが、本日やっと正常動作にこぎつきました。今後は効率化をめざした改良を主体に行います。伊豆沼ではバス稚魚が出現しました。6月中旬まではミジンコを食べて成長しますが、その後は魚食性に変身します。変身前に1尾でも多く駆除するため、応援おねがいします。

次回は6月4日(日) 午前8時鹿島台公民館

シナイはアイヌ語で大きな川(沢)を意味します。小さな流れが大きな川になるように地道な活動を続けていきましょう。



シナイモツゴ BCC 通信

会員の情報共有を図るため、毎月2～3回メール配信しています。配信を希望される方は事務局へメールでお知らせください。